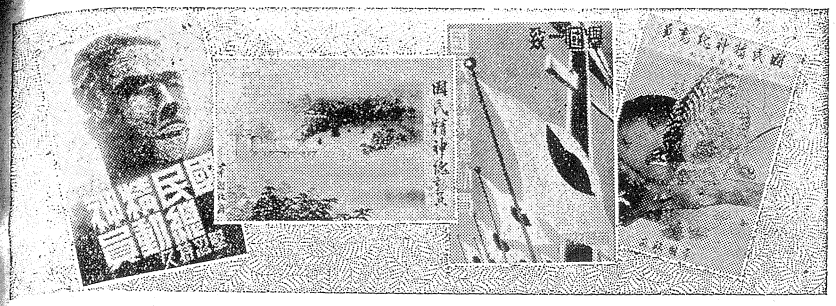


文部時報

第六百三十五號

目次

卷頭（勅語奉答）

教育に關する勅語と國民精神總動員……文部大臣 男爵 荒木貞夫……二

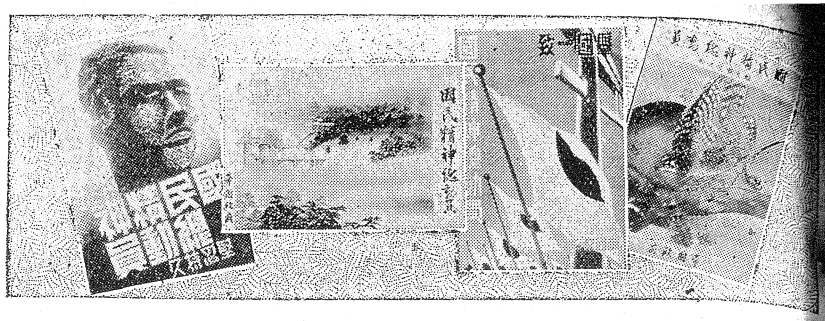
忠孝道德について……川村理助……五

公民科の精神並に其の取扱方（五）……文部省圖書監修官 樋田豐太郎……一九

地方自治に關する諸問題……石原雅二郎……二五

支那經濟及社會事情（一）……東亞同文書院教授 馬場鍬太郎……三七

明治以降美術の變遷（一）……美術研究所囑託 隈元謙次郎……五〇



——◇統　計◇——

宗教に關する信徒數調（三）……文部省宗教局……五九

昭和十一年度文部統計摘要（七）……文部大臣官房文書課……六六

昭和十三年度全國地方費豫算總額……文部大臣官房文書課……七一

省令……文部省令第二十一號（中央氣象臺支臺附屬地磁氣觀測所附屬測候所及附屬觀測所ノ位置及名稱竝其ノ事務開始ニ關スル件）……七四

訓令……文部省訓令第二十六號（地方測候所職員定員中改正）……七四

告示……文部省告示第三百二十三號（中央氣象臺支臺附屬測候所及附屬觀測所事務開始）——同第三百二十四號（地方測候所ノ位置中削除）——同第三百二十五號（北海道紗那測候所外十四ケ所廢止）——同第三百二十六號（銚子測候所廢止認可）——同第三百二十七號（福島測候所同上）——同第三百二十八號（松山測候所同上）——同第三百二十九號（鹿兒島測候所同上）——同第三百三十號（教員無試驗檢定指定學校名及學科目中改正）——同第三百三十一號（重要美術品等認定）——同第三百三十二號（岡山縣兒島商業學校位置變更認可）——同第三百三十三號（日本女子美髮學校設立者變更認可）——同第三百三十四號（鳥取縣境町字花町舊臺場ニ設置ノ暴風雨標揚揚中止）……七五

敍任及辭令（自昭和十三年十月一日至同十日公表ノ分等）……七八

彙報……教育效勞者表彰——學位授與——檢定教科用圖書——歌詞及樂譜採用認可——圖書推薦——重要美術品等調査委員會——轉任——退職——死去……五八

明治以降美術の變遷（一）

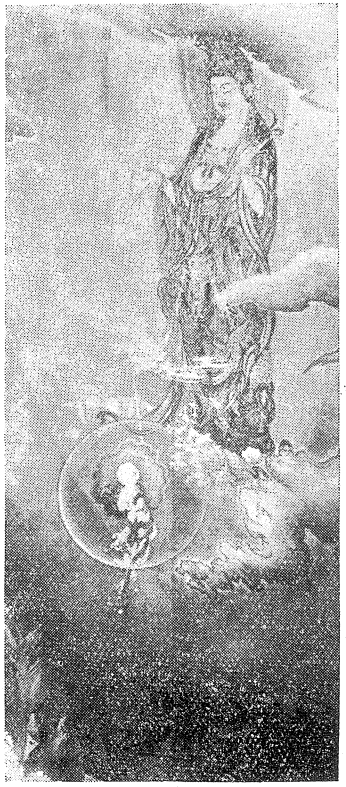
美術研究所囑託　隈元謙次郎

日本畫

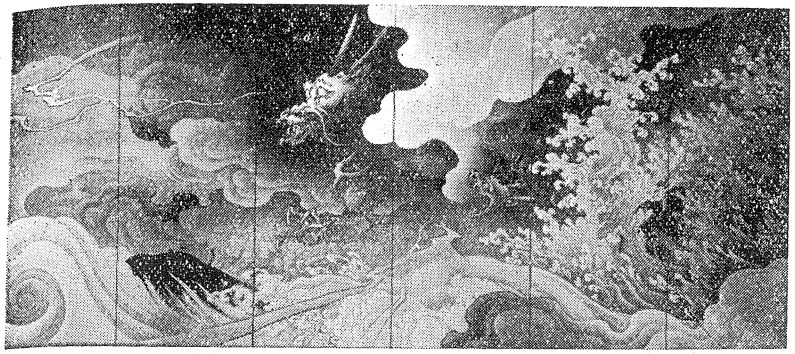
一　明治維新なる政治的、社會的革新は、暫時吾が傳統文化の進展を阻止したかに見えた。即ち幕末兵燹の間は美術を顧るに遑なく、維新成つての當面は該制度の確立と泰西文物の移植に寧日なく、吾が固有美術の如きも棄てゝ顧られなかつた。然し乍ら、日本畫に於ては東京に於て德川時代以來の傳統を守り、次で來るべき內外諸流融合の先驅となつた菊池容齋、柴田是眞、河鍋曉齋、月岡芳年の如きと、幕末以來の流行と明治初年に於ける漢學の隆盛に伴うて喧傳された一群の文人畫家がある。容齋（天明八年―明治十一年）は四條、土派の兩派を綜合し、又西洋畫法を學び、明治初年の隱然たる大家であり、其門に松本楓湖（天保十一年―大正十二年）、渡邊省亭（嘉永四年―大正七年）の如きが出た。是眞（文化四年―明治廿四年）は當時蒔繪の大家として知らるゝと共に、畫家として著名であり、曉齋（天保二年―明治廿二年）は狩野派に通曉し又浮世繪派の畫風を折衷して飄逸なる筆を以て多くの作品を遺した。芳年（天保十年―明治廿五年）は浮世繪を學び、明治風俗畫の先驅となつた。而して文人畫家としては、東京に安田老山（天保元年―明治十五年）、奥原晴湖（文政十年―大正二年）、川上冬崖（文政十年―明治十四年）野口幽谷（文政十年―明治廿一年）、瀧和亭（天保元年―明治廿四年）、渡邊小華等があり、足利に田崎草雲（文化十二年―明治廿一年）があつた。然し、やがて日本畫諸派の復興と共に文人畫は次第に衰頽を來すに至つた。

轉じて、近世以來日本畫の中心地たりし京都を見れば、明治初年藝苑の振はなかつたことは東京と同樣であるが、日本畫は染織、製陶等の工藝美術と結んで徐々に隆盛を回復した。而して初期の作家に岸竹堂、森寬齋、幸野楳嶺等がある。竹堂（文政九年―明治三十年）は岸派を繼いで寫生に長じ、寬齋（文化十一年―明治廿七年）は圓山派を以て立ち、門弟に野村文舉、山元春擧等を出した。楳嶺（弘化元年―明治廿八年）は圓山、四條の兩派を學び、子弟の薫陶につくし、菊池芳文、三宅吳曉、竹內栖鳳、谷口香嶠、都路華香等爾後活躍した多くの作家を輩出した。又京都の文人畫家には、夙く日根野對山（文化十年―明治二年）、中西耕石（文化四年―明治十七年）、田能村直入（文化十一年―明治四十年）、谷口靄山（文化十三年―明治卅二年）等がある。

二　而して、明治十年代に入り、諸制度の急速なる整備と共に、棄てゝ顧みられなかつた吾が國固有美術の復興、奬勵の聲が興り來つた。即ち、是より曩明治六年、恰も無暴なる舊物破壞を企て、歐洲文明に眩惑されつゝあつた時、墺國維納萬國博覽會に出品した我が古美術工藝品は意外の反響を呼び、其の稱讃は漸く吾が當局及び識者の覺醒を促し、茲に政府は明治十年第一回內國勸業博覽會及び十四年第二回內國勸業博覽會を東京に開催するや、美術及美術工藝部門に於ても日本全國に檄を飛ばして出品を勸誘し、成功ををさめた。次で政府は明治十五年及同十七年東京に內國繪畫共進會を開催し、特に日本畫のみを出陳して、固有美術保護奬勵の意圖を明かにした。又、民間に於ても佐野常民、山高信離、下條正雄、河瀨秀治等夙く日本固有美術の振興をとなへ、又フェノロサ E. Fenollosa、ビゲロウ Bigelow 等在留外國人の慫慂もあつて、漸く國粹主義の輿論は盛となつた。明治十二年佐野、山高等の諸氏は古美術の展觀を目的とする龍池會を設立し、爾後展覽會、講演會に日本美術振興をはかり、明治二十年に至り、日本美術協會と改稱し、明治時代に於ける美術團體の一つとして重きをなした。次で、明治十七年岡倉覺三、フェノロサ、河瀨秀治等謀つて鑑畫會を創立し、古美術の鑑賞と同時に新日本畫



狩野芳崖作
慈母觀音



橋本雅邦作　龍　虎（龍の部）

の製作の指導にあたつた。鑑畫會に於て頭角を顯し、明治時代日本畫の急先鋒となつた者に狩野芳崖と橋本雅邦とがある。

而して、美術教育に於ては、從來洋風畫の勃興と共に小學以上の生徒には主として鉛筆畫を課したが、國粹主義の輿論の勃興により賛否兩論沸騰し、圖畫教育に關する調査を必要とし、明治十七年七月文部省は專門、普通兩學務局に委員を置き、翌十八年十一月に至り學務一局（故の專門學務局）に圖畫取調掛を設け、フェノロサ、岡倉覺三、小山正太郎等を委員として調査せしめた。然し議論沸騰して取捨決せず、遂に西洋の事情を調査して決することゝし、十九年當時獨乙に在つた濱尾新を美術取調委員長とし、又フェノロサ、岡倉の兩者を委員として、歐洲に派遣した。彼等は諸外國に於ては、國民固有の技を基礎とし、基礎固くして然る後外邦の長所を採用しつゝある旨を說いた。斯くして、此の趣旨に基き、將來美術教育に從ふべき人の養成機關として、明治二十年勅令を以て東京美術學校が創立された。校長に濱尾新が任ぜられ、二十三年岡倉覺三が之に代つた。開校當時の學科は專修科に於て、繪畫、彫刻及び美術工藝の三科を設け、繪畫に於ては日本畫を、彫刻に於ては木彫を、美術工藝に於ける金工には彫金のみを用ひた。而して、繪畫科に於ては、主として狩野芳崖及び橋本雅邦が用ひられた。芳崖（文政十一年—明治廿一年）は狩野派を學び、明治初年に於ては未だ名を現はさず、フェノロサ、岡倉に見出されて文部省圖畫取調掛に用ひられ、東京美術學校の創立に參劃した。然るに此の巨匠は同校の授業開始を俟たずして惜しくも歿した。雅邦（天保七年—明治四十一年）は芳崖の同門であり、彼と共に圖畫取調掛に勤務し、芳崖逝去後はまた繪畫科の主任教授として多くの生徒を薫陶した。爾來彼が東京美術學校に於て、又日本美術院の重要なる指導者として活躍したことは後に述べる通りである。而して、雅邦のほかに圓山派の寫實派を代表するものとして川端玉章（天保十三年—大正二年）が教授に擧げられ、其他巨勢小石、狩野友信、結城正明等があつた。

又固有美術保護奬勵の爲に設けられた諸制度に、帝室技藝員制度と臨時全國寶物取調局がある。前者は明治二十三年當時不遇に置かれた藝術家の優遇の思召により設けられたものであり、明治維新以來功勞あつた作家が選任された。其第一回の選任にあづかつた畫家に森寛齋、守住貫魚、橋本雅邦、狩野永悳、田崎草雲があり、其後數次に亙り名家が加へられて現在に至つてゐるが、其主なる者に野口幽谷、瀧和亭、幸野楳嶺、岸竹堂、川端玉章、荒木寛畝、今尾景年、竹內栖鳳、川合玉堂、山元春擧、寺崎廣業、小堀鞆音、下村觀山、富岡鐵齋、横山大觀等がある。而して、臨時全國寶物取調局は、明治二十一年宮內省に設けられ、九鬼隆一、山高信離、黑川眞賴、岡倉覺三等の委員が古社寺及び個人所有の古美術品の調査にあたり、多くの優れた古美術を發見した。此の制度は內務省に移され、又文部省に移されたが、今日の國寶保存會の先驅をなすものである。

橋本雅邦作　龍　虎（虎の部）

三

斯くの如く、明治二十年代に入り漸く各種の美術施設を見たが、又第三回（明治二十三年）、第四回（明治二十八年）內國勸業博覽會に於て見る如く、雅邦をはじめ、野口幽谷、瀧和亭、岸竹堂、川端玉章、田能村直入、望月玉泉、佐竹永湖、荒木寛畝、松本楓湖、野口小蘋等の諸家各々力作を出品して活躍した。然し、此の時代に入り美術界全般に亘り、新進作家の擡頭があり、是等の人々によ

つて新しき美術團體が創立された。日本畫に於ては、日本美術協會に對して、日本青年繪畫協會、續いて日本繪畫協會が結成され、洋風畫に於ては、明治美術界に次いで白馬會が創立された。

日本美術協會は明治二十年龍池會の組織、名稱を改め、繪畫、彫刻、工藝等各部門に亙る大規模なる團體とし、春秋二回展覽會を開催し來つたが、其の業蹟は堅實なりしも其の主張は保守的なるを免かれず、これに對し明治二十四年新進畫家は保守的な日本畫の打開と新日本畫の建設を企圖して日本青年繪畫協會を組織した。即ち其の主唱者は川端玉章門の高橋玉淵、福井江亭、島崎柳塢、山田敬中、川邊御楯門の郡田丹陵（明治五年——）及び當時既に一家をなせる寺崎廣業（慶應二年—大正八年）、尾形月耕（安政六年—大正九年）、池田眞哉、水野年方等である。而して、彼等は岡倉天心を會頭に推し、明治二十五年第一回繪畫共進會を開催し、漸く世人の注目を惹くに至つた。回を重ねて明治二十九年に至つたが、此の間東京美術學校に於ては多くの卒業生を出し、是等の中には横山大觀（明治元年———）、下村觀山（明治六年—昭和五年）、菱田春草（明治七年—明治四十四年）、西郷孤月（明治六年—大正元年）等もあつた。同校々長としての岡倉天心は是等の人々の作品を通して自己の藝術理想を實現し、併せて彼等の社會的位置を穫得せしめんが爲に、是等の作家を從來の日本青年繪畫協會に參加せしめ、同會の名稱をも日本繪畫協會と改め、雅邦、玉章の兩大家を加へて、其の統率權を握つて、此の年秋より毎歳共進會を開催するに至つた。此の第一回共進會に於ては同協會を三部に分ち、第一部を東洋の畫法を維持する者、第二部は西洋の樣式に基くもの、第三部は從來の畫法に拘らず新に啓開を謀らむとする者とした。而して第二部は恰も其時第一回展覽會を開催したる洋畫團體白馬會と聯合の名目を立て、實質上繪畫協會の共進會は、保守派と急進派の二部によつて構成された。而も天心が最も力を注ぎ、又世人の注目を集めたのは後者であつた。此の急進派の活躍は間もなく日本美術院が結成さるゝに及んで益々活潑となり、一方保守派の人々は別に日本畫會を創立するに至つた。

菱田春草作
梅樹下睡猫

明治三十一年岡倉天心は故あつて東京美術學校長を辭した。是を動機として雅邦も教授を辭し、天心、雅邦の薫陶を受くるところ深かつた横山大觀、下村觀山、西郷孤月、菱田春草をはじめ寺崎廣業、山田敬中、小堀鞆音（元治元年—昭和六年）等又これに殉じて職を辭して野に下り、此の年日本美術院を創立し、主幹に雅邦を評議員長に岡倉を推し、繪畫、彫刻、工藝の研究制作を開始した。而して其の作品の發表機關としては、從來の日本繪畫協會の共進會に據り、兩者聯合の名目を以て、此年十月第一回展覽會を開いた。爾後毎歳展覽會を開催し、雅邦をはじめ大觀、觀山、春草等何れも大作を發表した。然し、彼等の淺線彩畫による人物、山水等の野心的作品は、觀照と技巧に於て從來の日本畫に一轉機を作つたが、世人の注目が大きかつただけ其の反響も毀譽相半した。而して日本美術院は、明治三十九年に至り、岡倉及び中堅會員たりし大觀、春草、觀山等の外遊、院自體の財政的都合により、展覽會等を中止し、常陸の北境五浦に研究所を移し、主なる會員も此處に移つた。

寺崎廣業作
題四溪

而して、明治三十年代は日本美術院の活躍と共に、多くの小美術團體の創立活動に依て日本畫界の隆盛を反映してゐる。即ち曩に擧げた日本畫會は荒木寛畝（天保二年—大正四年）、野村文擧（安政元年—明治四十四年）を中心として組織された。此の外結城素明（明治八年———）、福井江亭、平福百穗（明治十一年—昭和八年）、石井柏亭（明治十五年———）等の少壯作家は自然主義を標榜して无聲會を、又大野靜方、鏑木清方（明治十一年———）等は烏合會を創立し、又安田靫彦（明治十七年———）、今村紫江（明治十三年—大正五年）等の青年畫家又紅兒會を組織した。是等の外巽畫會、丹青會、日月會、美術研精會等枚擧に遑がない。

飜つて京都に眼を移せば、明治十三年府立畫學校（明治三十四年京都市立美術工藝學校と改稱）を設置した。其初期に於て教授に當つた者に、田能村直入、幸野楳嶺、望月玉泉、小山三造、谷口藹山、鈴木百年、田村宗立等がある。而して、京都には明治四年以來京都博覽會毎歳開催され、明治二十年頃よりは新作美術品の展觀が行はれたが、明治二十二年に至り、別に京都美術協會が組織され、新古美術品展覽會の名稱を以て毎歳展覽會が開催された。此の頃より東京に於ける國畫復興の氣運は京都にも反映し青年畫家の擡頭著しく、東京に於ける日本美術協會、日本繪畫協會等にも參加出品して次第に優位を占むるに至り、文展以後に於ける京都日本畫壇の盛況を豫示するものがある。其の著しき作家を擧ぐれば、今尾景年（弘化二年―大正十三年）、菊池芳文（文久二年―大正七年）、竹内栖鳳（元治元年―）、山元春擧（明治四年―昭和八年）、谷口香嶠（元治元年―大正四年）、都路華香（明治三年―昭和六年）等がある。又明治四十二年、京都市立繪畫專門學校が設立され、こゝから多くの新人が輩出するに至つた。

下村觀山作
天心先生

四　以上の如く、明治三十年代に至り、東西日本畫界の隆盛を來したが、小黨分立の時代であつた。然るに、明治四十年に至り文部省の企劃に基づく綜合美術展覽會が開設さるゝや、に至つた。是より曩、明治三十九年西園寺内閣組織さるゝや、伯爵牧野伸顯は文部大臣に擧げられた。牧野伯は曩に伊太利、墺太利兩國公使に歷任し、美術行政にも通曉し、豫て吾が國にも佛蘭西のサロンの如き組織を開設せんとの抱負を持つてゐたが、時の文部省專門學務局長福原鐐次郎、東京美術學校々長正木直彦等の獻策、又東京帝國大學教授大塚保治、洋畫家黑田清輝の建議に依り、明治四十年六月に至り、美術審査委員會官制を定め、文部省美術展覽會（文展）を開設することゝなつた。其の第一回審査委員會委員に擧げられた者は、日本畫に於ては、川端玉章、荒木寛畝、野口小蘋、寺崎廣業、小堀鞆音、川合玉堂及び橋本雅邦、下村觀山、横山大觀があり、京都の畫家として今尾景年、菊池芳文、竹内栖鳳、山元春擧がある。而して文展初期の審査員に於ての特色は、學者及び行政家を委員に參加せしめたことであつて、日本畫に於ては、中澤岩太、松井直吉、大塚保治、塚本靖、高嶺秀夫、岡倉覺三、藤岡作太郎、中川忠順、今泉雄作があつた。審査員の選出に就ては、文部省の最も公平を期したところであつたが、其結果は日本美術院派に厚く、日本美術協會、日本畫會を無視したと云ふので、それ等の主なる作家が正派同志會を組織して文展に出品せず、別に展覽會を開き、更に之に對抗し文展を支持せる日本美術院、大同繪畫會、烏合會、紅兒會等の作家は國畫玉成會を組織し、會長に岡倉覺三を推した。かゝる事情のもとに、第二回文展に際しては、審査員に舊派の高島北海、野村文擧、山岡米華、益頭峻南、荒木十畝、望月金鳳が加へられたが、是は國畫玉成會の會員の憤激するところとなり、彼等は第二回文展と同時に、其の展覽會を開催した。然し第三回以後は、文展に復歸し、大正三年日本美術展覽會の再興迄は、文展は其の所期の綜合展覽會としての實を充分に發揮した。文展中期頃迄の作品として擧ぐべきは、廣業の「溪四題」、「夏の一日」、大觀の「山路」、「瀟湘八景」、觀山の「木閒の秋」、「魔障の圖」、春草の「賢首菩薩」、「落葉」、栖鳳の「飼はれたる猿と兎」、「あれ夕立に」、春擧の「鹽原の奥」、「雪松圖」、玉堂の「夕月夜」、「波」、今村紫紅の「近江八景」、安田靫彦の「夢殿」、鏑木清方の「墨田川舟遊」、平福百穗の「七面鳥」、菊池契月の「鐵漿蜻蛉」等がある。是等の外、文展に於て活躍せる者或は其の名を認められた者に前田青邨、野田九浦、尾竹國觀、同竹坡、結城素明、松岡映丘、木島櫻谷、橋本關雪、上村松園、北野恒富等がある。

而して大正元年、第六回の文展から日本畫は第一科と第二科に分たれ、保守派なる第一科と急進派たる第二科とは自ら對立的傾向をとつた。越えて大正三年大觀、觀山等は岡倉天心の逝去により更に名目のみとなつた日本美術院の再興を計つた。是に參劃したのは今村紫紅、安田靫彦、木村武山、小杉未醒等であり、此の秋を以て再興第一回展覽會を開いた。是より先、文展は審査員の陶汰を行ひ、日本美術院よりは觀山のみを任命したので、彼は大觀に殉じて審査員を退いた。かくして爾後日本美術院は在野團體として活躍し、小林古徑、前田青邨、大智勝觀、富田溪仙、荒井寛方、中村岳陵、小川芋錢、近藤浩一路、速水御舟、川端龍子等を同人に加へ、多少の經緯はあつたが、今日に至つてゐる。此の間、大觀の「生

々流轉」、觀山の「弱法師」、靱彦の「御產の禱」、青邨の「洞窟の賴朝」、紫紅の「熱國の卷」、古徑の「竹取物語」、溪仙の「雲ケ畑の鹿」、御舟の「翠苔綠芝」等記念的な作品が出陳された。

而して、大正七年京都に於ても、土田麥僊を中心として、青年畫家村上華岳、小野竹橋、榊原紫峰等が國畫創作協會を組織し、日本畫界に新鮮な刺戟を與へ、後洋畫部をも設けたが、昭和三年解散した。

五　大正八年、政府は美術審査委員會を廢し、新に美術奬勵機關として帝國美術院を創立し、美術展覽會も同院の經營に移した。而して院長は森林太郎(鷗外)を任命し、會員には日本畫より小堀鞆音、川合玉堂、竹內栖鳳、山元春擧、富岡鐵齋、今尾景年、松本楓湖が擧げられた。鐵齋を除いては、孰れも文展創設當初よりの審査員であるが、鐵齋(天保七年—大正十三年)は、生涯を通じて繪畫運動の表面に於ては活躍しなかつたが、其の博學と氣品ある作品は近代稀に見る所であり、彼が文人畫の復興に寄與したるところは極めて大である。而して第一回帝展の審査員には結城素明、松岡映丘、菊池契月、橋本關雪、西山翠嶂、川村曼舟、鏑木清方、松林桂月、小室翠雲が選ばれ、嚴選を旨とし、個性を尊重して、文展後期に於ける惰性の一掃に努めた。森林太郎歿して、黑田清輝、福原鎣次郎、正木直彥等院長に任ぜられた。又會員も老大家の逝去に依り漸次更り、荒木十畝、小室翠雲、結城素明、都路華香、菊池契月、西山翠嶂、鏑木清方、松岡映丘、平福百穗、川村曼舟等が擧げられた。而して昭和九年に至る十五回の展覽會に於て、栖鳳「玉堂、春擧等の會員の作品の外、百穗の「荒磯」、「枯草」、清方の「築地明石町」、「三遊亭圓朝」、映丘の「右大臣實朝」、關雪の「玄猿」、靈華の「離騷」、土田麥僊の「燕子花」等記錄さるべき作家に石井林響、蔦谷龍岬、廣島晃甫、田村彩天、山口蓬春、堂本印象、福田平八郎等がある。

而して、昭和三年日本美術院に於て其の鬼才を稱された川端龍子は同院を脫退し、翌四年青龍社を創立し、健剛なる會場藝術を標榜して每歲展覽會を開催し今日に至つてゐる。

猶昭和十年以後の帝展の改組、帝國藝術院の創立及び美術界の動きに就ては最近のことに屬し、玆には省略することゝする。

文部時報刊行計畫摘要

一 目的　本省行政ニ關スル法令竝ニ諸般ノ施設事項ヲ周知セシムルト共ニ所管ノ行政及教育機關等ノ聯絡提携ニ便ナラシムルヲ以テ目的トス

二 內容　本時報登載事項ノ大要左ノ如シ

詔書　勅語　法律
勅令　閣令　省令
訓令　告示　告諭
訓示　指令（例規トナルモノ）　通牒（例規トナリ又ハ一般ノ參考トナルモノ）
法令解說　質疑應答（本省ヨリ公文ニテ問答シタルモノ）
任免、陞敍、敍位、敍勳表彰　復命書及報告書
講演、講話、談話　研究調査　統計
人事　公告　寫眞

三 編纂　文部時報編纂ノ爲編纂委員長竝編纂委員若干名ヲ置ク
編纂委員長ハ文書課長ヲ以テ之ニ充テ編纂委員ハ文書課員中ヨリ之ヲ命ズ
必要アルトキハ審査委員ノ意見ヲ求ムルコトアルベシ
資料蒐集ノ爲省內各局課ニ文部時報報告委員ヲ置ク
文部時報報告委員ハ各部局課ノ理事官、屬、囑託等ヲ以テ之ニ充ツ
必要ニ應ジ直轄各部、各府縣其ノ他ヨリ資料ヲ求ムルコトヲ得

四 發行　本時報ハ菊版、每號約六十四頁、定價金貳拾錢ヲ標準トシ每月三回一ノ日ヲ發行期日トス

定價表

一部	金貳拾錢	送料共
一ケ月	金六拾錢	送料共
六ケ月	金參圓六拾錢	送料共
一ケ年	金七圓貳拾錢	送料共

臨時增刊又は增大號發行の節は別に代金申受けます
御註文は總て前金に願ひます前金切れの場合は送本いたしません

廣告料

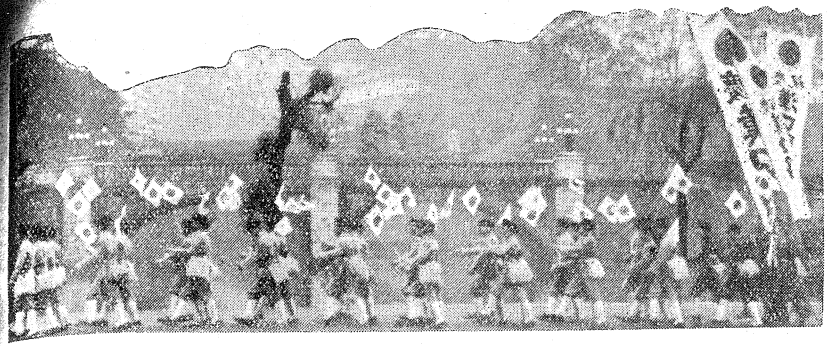
廣告料は一頁五拾圓、二分ノ一頁參拾圓、四分ノ一頁拾八圓とす
揭載頁數は壹部每に拾參頁を超ゆることを得ず
右文部省の御指定に依つたものです

昭和十三年十月十九日印刷納本
昭和十三年十月二十一日發行（第六三五號）

發行者　東京市麴町區土手三番町十三番地　大谷仁兵衛
印刷者　橫濱市戸塚區戸塚町字前牧字六百七十番地　大庭公平
印刷所　東京市牛込區西五軒町五十二番地　行政學會印刷所第二工場　電話牛込二九九六番

東京市京橋區銀座西七丁目一番地
發行所　帝國地方行政學會
電話銀座六六〇、六六一、六六二、六六三番
振替貯金口座東京十三番

禁無斷轉載



文部時報

第六百三十六號

目次

卷頭（唱歌　明治節）

明治天皇を景仰し奉る……東京女子高等師範學校長　下村壽一……二

學校滑空訓練について……文部省普通學務局學務課長　岩松五良……七

公民科の精神竝其の取扱方……東京商科大學教授商學博士　藤本幸太郎……一二

日本史に一貫せる精神……奈良女子高等師範學校教授　佐藤小吉……二〇

滿蒙北支經濟開發問題……大阪朝日新聞社經濟部長　武内文彬……二六

支那經濟及社會事情（二）……東亞同文書院教授　馬場鍬太郎……三六

明治以降美術の變遷（二）……美術研究所囑託　隈元謙次郎……四七

——◇統　計◇——

昭和十一年度文部統計摘要（八）……文部大臣官房文書課……五五

告示……文部省告示第三百三十五號（青年學校教員資格指定）——同第三百三十六號（官立高等商船學校別科生徒募集）——同第三百三十七號（尋常小學算術第四學年教師用下定價）——同第三百三十八號（東武實業學校名稱變更認可）——同第三百三十九號（千葉工業學校位置變更認可）——同第三百四十號（所澤商業學校名稱變更認可）——同第三百四十一號（所澤實科高等女學校改稱認可）——同第三百四十二號（潮止自治學校名稱變更認可）……五九

敍任及辭令（自昭和十三年十月十一日至同二十日公表ノ分等）……六〇

彙報……學術研究奬勵金交付——本年度に於ける學校滑空訓練の實情——講師囑託竝解囑——檢定教科用圖書——實業學校長認可——帝國圖書館閲覽人員等——歸朝——休職——休職滿期——退職——失職——死去——正誤……七三

明治以降美術の變遷（二）

美術研究所囑託　隈元謙次郎

洋風畫

一

明治期に於ける西洋畫の移植と隆盛は、我が美術史上劃期的のことであり、明治以降の美術を特色づけるものである。近世初期切支丹傳導と共に、南歐人に依つて初めて西洋畫法が齎らされたが、禁壓と共に其の傳統を失ひ、次で和蘭との交易に依り再び移入され、平賀源内、司馬江漢等の畫家が出でたが、德川末期に至つては、甚だ振はなかつた。只幕府の蕃書調所（後の開成所）に於て洋畫の研究が行はれ、これが明治時代洋風畫の先驅となつた。其の指導者となつた者は川上冬崖（文政十年―明治十四年）である。冬崖は夙く日本畫を學ぶと共に和蘭語を學び、蕃書調所に用ひられ、安政四年同所に繪圖調方が設けらるるや其の出役となり、其の後幕末に至る迄の間に多くの畫家を養成した。是等の人々の中に高橋由一（文政十一年―明治二十七年）をはじめ、近藤正純、宮本三平等があつた。

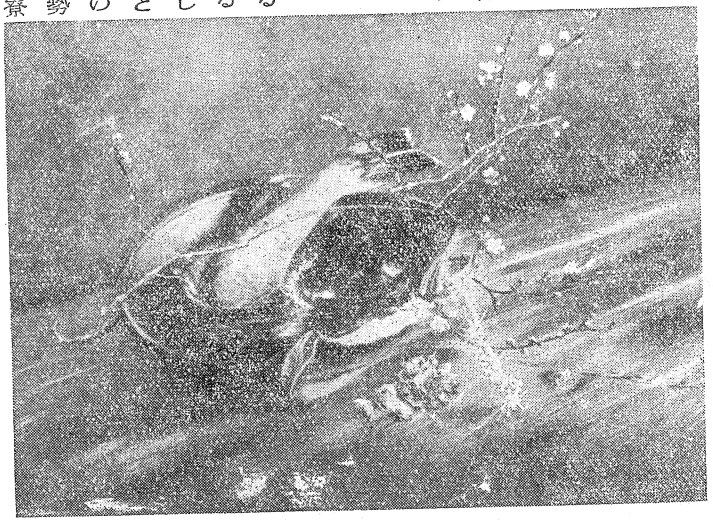
又、安政以來横濱にイラストレーテッド・ロンドン・ニュースの特派記者となつて來朝してゐたチャールス・ワーグマン Charles Wirgman（天保六年―明治二十四年）があり、稚拙ではあつたが、油繪、水彩畫をよくした。彼に就いて學んだ者に高橋由一を始め、五姓田義松（文政二年―大正四年）等があつた。義松の父一世芳柳（文政十年―明治二十五年）は、獨學に依つて洋畫を學び、和洋折衷の肖像畫を描いて知られてゐた。彼は横濱に家塾を開いてゐたが後東京淺草に移つた。

斯くして、明治初期に於て急速に泰西の文化文明が輸入されるにつれて、洋風畫の研究も次第に盛んとなり、東京に於ては諸家の私塾が設けられて、多くの門生を養成した。其の

代表的なものに川上冬崖の聽香讀畫樓、高橋由一の天繪學舎、國澤新九郎（弘化四年―明治十年）の彰技堂があり、其他横山松三郎、五姓田義松等の私塾があつた。是等の私塾はもとより、設備整はず、指導法又幼稚であつたが洋風畫の豫備知識の涵養には役立ち、又彰技堂及び天繪學舎の展覽會は、洋風畫の普及に寄與するところ大であつた。

二

而して、當時の洋風畫の欝然たる勃興は、洋畫の持つ寫實性に對する興味であつたことは否めない。然し洋風技法の攝取の必須であつたことは、機械、建築、土木等の諸工學の移入と不可分であつた。斯かる情勢のもとに、工部卿伊藤博文は工學寮（後工部大學校と改稱）に附屬する美術學校を創設し、伊太利よりアントニオ・フオンタネージ Antonio Fontanesi（文政元年―明治十五年）ヴインツエンツオ・ラグーザ Vincenzo Ragusa カツペレツチ Cappelletti, G. V. の三名を招聘し、其の指導に當らしむることとした。即ち、明治九年のことである。こゝに於て洋風畫の研究家にとつて劃期的な施設が生れ、初めて吾が國に於て正式なる洋畫教育が施さるゝに至つた。依つて、前述の聽香讀畫樓をはじめ、天繪學舎、新技堂等に學んでゐた青年等は競つて工部美術學校に入學した。而して豫科の學科をカツペレツチが、繪畫科をフオンタネージが擔當した。カツペレツチは後建築家として活躍した。フオンタネージは近代の伊太利でも有數の風景畫家であつたが、彼は來朝に際し、西洋名彫刻の石膏像をはじめ、名作の寫眞、石版、銅版畫等



鯛　圖　高橋由一筆

を極めて豐富に携へ來り、之等の版畫の臨寫をはじめ、石膏像、人體、風景等の寫生を指導した。彼の薫陶を受けたる主なる者を擧ぐれば、小山正太郎（安政四年―大正五年）、松岡壽（文久二年―）、中丸精十郎（以上川上冬崖門）、淺井忠（安政三年―明治四十年）、西敬、守住勇魚（以上國澤新九郎門）、高橋源吉、森元貞德（以上高橋由一門）及び五姓田義松、山本芳翠（嘉永三年―明治三十九年）等があつた。然るにフオンタネージは約二年の滯在の後、病を得歸國した爲に、後任にフエレツチを聘したが、技拙劣の爲生徒の多くは退學するに至つた。依つて政府は更に伊太利政府の正式の推薦により、サンジョヴアンニを招聘し指導にあつたらしめた。彼の薫陶を受けたる者に大野幸彦（安政六年―明治二十五年）、松室重剛、堀江正章等がある。而して、工部美術學校に學べる之等の人々は、いづれも爾後の洋風畫の發達に貢獻するところ大であつた。然るに、工部美術學校は、明治十六年に至り、諸種の事情に依り、閉鎖さるゝに至つた。是には西南戰役後の國帑の疲弊、工部大學校の東京帝國大學への合併、歐化主義に對する反動としての國粹主義の勃興等が考へられる。

國粹主義の勃興に伴ひ、小學以上の美術教育に關し、吾が國從來の毛筆畫を課するか、歐風の鉛筆畫を課するかに就いて議論の沸騰したことに就ては、日本畫の部門に於て述べたが、文部省に於ける圖畫取調掛の設置により委員の多數は前者に贊し、續いて明治二十年東京美術學校の創立に際しては、日本畫を始め、從來の諸美術の部門のみが置かれた。然し、やがて、時勢の進展に伴ひ、洋風技術の攝取の必要は再び確認され、明治二十九年に至り、東京美術學校に西洋畫科が置かるゝに至つたことは次章に述べる通りである。

三

工部美術學校の創立、及び第一回內國勸業博覽會の前後は洋風畫が順調に發展しつゝあつた時代であつた。第一回內國博には日本畫と共に、高橋由一、五姓田義松、山本芳翠等多くの油繪が初めて民衆に綜合的に展觀され、明治十四年の第二回內國博に於ては、サンジョヴアンニをはじめ工部美術學校の生徒の出品もあり、賑かであつた。然るに、翌十五年及び十七年の農商務省の內國繪畫共進會に於ては、其の範圍は從來の日本畫の技法によるものゝみに限られた。斯くして、數年の間洋風畫の沈滯の中に在つたが、明治十九年東京府工藝共進會の開催に際し、擧つて出品し、次で洋風美術家の最初の團體明治美術會が設立さるゝ氣運となつた。即ち、長く歐洲留

學中の諸家の歸朝と諸畫塾の創設である。即ち、當時の畫塾には小山正太郎の不同舍、巴里より歸朝せる山本芳翠の生巧館、ミュンヘンに留學せる原田直次郎（文久三年—明治三十二年）の鐘美館をはじめ、羅馬に學んだ松岡壽、ヴェネツィアに長く滯在した河村清雄（嘉永五年—昭和九年）其他淺井忠、大野幸彦、中丸精十郎等の家塾があつた。

而して、明治二十二年五月に至り、洋畫團體明治美術會が生れた。即ち前記の小山、山本、原田、松岡、河村、淺井、大野、中丸等の外に高橋源吉、松井昇、本多錦吉郎、五姓田義松等の畫家の外、長沼守敬、後藤貞行、菊池鑄太郎等の洋風彫刻家等を加へ當時の洋風美術家を網羅し、會頭に渡邊洪基を推し、原敬、岩下清周を幹事とし、其他贊助會員として、花房義質、外山正一、大鳥圭介、福地源一郎、益田孝等があつた。斯くて、同年秋第一回展覽會を開催せるを初めとして爾後殆んど毎歲續いて開催し、洋風美術の發達、普及に貢献し、明治三十四年に至つた。此間、明治美術會附屬教場を設け生徒を指導した。

而して、明治洋風畫史に一時期を劃したのは、印象派の移入と、黑田清輝の業績である。印象派の作品が我が國に紹介されたのは、明治二十六年林忠正の蒐集中のシスレー、ルブール、ギョウマン等の作品が明治美術會展覽會に參考品として出陳されたのが最初であつた。然し、此の時迄は、一部人士を例外として世人の注目を惹かなかつた。然るに明治二十六年滯佛約十年、ラファエル・コランに師事せる黑田清輝（慶應二年—大正十三年）は、久米桂一郎（慶應二年—昭和九年）と前後して歸朝し、翌二十七年山本芳翠の生巧館畫塾を讓り受けて天眞道場なる洋風畫研究所を設立し、生徒を指導した。こゝに初めて我が洋風畫家に依つて、印象派の畫風が傳へらるゝことゝなつた。而も、其の指導法も、從來人體研究には主としてチョークを以て著衣の人物を寫生せるに比して、專ら木炭による裸體寫生を行ふ等の變化があつた。天眞道場に參じた者に山本芳翠門の北蓮藏（明治九年—）、湯淺一郎（明治元年—昭和六年）、白瀧幾之助（明治六年—）、大野幸彦門の岡田三郎助（明治二年—）原田直次郎門の和田英作（明治七年—）等があつた。斯くて、明治二十九年に至り、黑田、久米及び岩村透を中心とし、前述の北、湯淺、白瀧、岡田、和田及び藤島武二（慶應三年—）、安藤仲太郎等に依つて白馬會が創設され、此の年秋を第一回とし、毎年展覽會を開催した。斯くて、彼等の試みた外光描寫は、從來の畫風に一轉期を齎した。白馬會は文展開設以後猶繼續したが、既に其の使命を達せるものとし、明治四十四年に至り解散したが、其の有志に依り光風會が設けられ今日に至つてゐる。

而して、明治二十九年時代の趨勢に伴ひ、曩に固有美術を中心として組織された東京美術學校に改革が加へられ、繪畫科を二部とし、日本畫の外に西洋畫が加へらるゝ事となつた。其の指導者となつた者は黑田清輝、久米桂一郎及び岩村透であつた。茲に於て、工部美術學校の廢止後十餘年の後、再び官設の洋畫教育機關が設置され、洋畫教育は大飛躍をなした。

明治三十年代に入り、明治美術會に屬せる人々滿谷國四郎（明治七年—昭和十一年）、中村不折（慶應二年—）鹿子木孟郎（明治七年—）、河合新藏（慶應三年—昭和十一年）、吉田博（明治九年—）、中川八郎（明治十年—大正十一年）等も歐米に留學し、明治美術會の解散後、太平洋畫會を創立し、毎歲展覽會を開催し、今日に至つてゐる。又明治美術會員たりし河村清雄、東條鉦太郎等を會員とする巴會の創立されたのも此の頃である。

而して東京美術學校以外に、溜池に白馬會研究所があり、谷中に太平洋畫會研究所があつて、後進を指導しつゝあつた。又京都は明治初年以來田村宗立、伊藤快彦の如きがあつたが、日本畫に比較して振はず、明治三十四年に至つて關西美術會が生れた。而して、翌三十五年東京美術學校教授たりし淺井忠が、新設の京都高等工藝學校教授として來着するに及び、關西美術會の內容も充實し、關西美術院なる研究所も京都に於ける洋畫研究の中心となつたが、明治四十年淺井の歿後其の統率者を失つた。然し、此の時代の關西美術院からは、

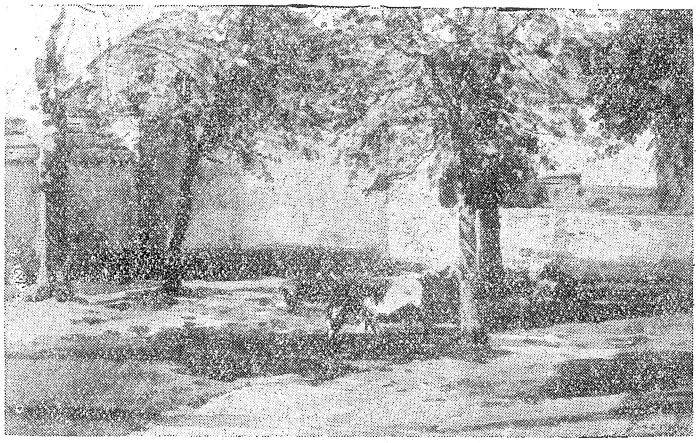
昔話り　黑田清輝筆

安井曾太郎（明治二十一年―）、梅原龍三郎（明治二十一年―）、津田青楓（明治十三年―）、齋藤與里、黑田重太郎等が輩出した。

四

明治四十年春開催された東京府勸業博覽會には、白馬會或は太平洋畫會に據つて作品を發表した洋畫家も擧つて出品し、其の綜合性に於て、此の年秋より開設された文部省美術展覽會にさきがけた。就中、中村不折、滿谷國四郎、和田英作、岡田三郎助等の作品が、世評に上つた。

文展の創立事情等に就ては、既に日本畫の部に於て述べたところであるが、第一回文展の審査員に擧げられた者は、松井直吉、中澤岩太、森林太郎、岩村透の學者批評家と黑田清輝、淺井忠、松岡壽、久米桂一郎、岡田三郎助、和田英作、中村不折、小山正太郎、滿谷國四郎等の作家がある。而して、初期文展に於ては、吾が國洋畫の各派を網羅するに成功し、黑田、岡田、和田、滿谷等夫々優れた作品を發表し、又出品者として聲名を高めた者に和田三造（明治十七年―昭和七年）、中川八郎、山本森之助（明治十年―昭和三年）、中澤弘光（明治七年―）、吉田博、小杉未醒（明治十四年―）、南薰造（明治十六年―）、石井柏亭（明治十五年―）、石川寅治（明治八年―）等がある。然し、同を重ねると共に、文展に於ても一つの型を生じ、これに反撥せんとする傾向も次第に胚胎した。明治末期より大正初期に亘り歐洲に留學せる諸家の歸朝に依つて後期印象派、フォーヴイズム等の畫風が次々に紹介された。即ち、藤島武二、湯淺一郎、山下新太郎、有島生馬、



山羊　淺井忠筆

南薰造、齋藤與里、梅原龍三郎、安井曾太郎、滿谷國四郎等は、或は文展に或は白馬會に或は個展に或は新しく創立された二科會等に發表した。

此の新傾向の畫風を旨とせる最初の私設展覽會は岸田劉生（明治二十四年―昭和四年）、木村莊八、齋藤與里、萬鐵五郎、硲伊之助、高村光太郎等に依り、大正元年開かれたフューザン會である。是は翌二年第二回を開催して止んだが、大正三年に至り二科會が生れた。恰も文展日本畫に於て新舊二派を分つて一科、二科の分科制を採つてゐたが、新舊の畫風の對立し來つた洋畫に於ても二科設置運動が起つた。然し、此の案は文部省の採用するところとならず、且つ日本畫の分科制をも廢止した。依つて、二科設置運動の畫家は別に私設團體を作り、作品を發表することゝなつた。即ち二科會である。其の最初の會員は、山下新太郎（明治十四年―）、石井柏亭、坂本繁二郎（明治十五年―）、湯淺一郎、有島生馬、小杉未醒、森田恒友（明治十四年―昭和八年）、齋藤豐作、津田青楓、梅原龍三郎、正宗得三郎、田邊至、柳敬助であつたが、後安井曾太郎、熊谷守一等が入つて會員となり、柳、田邊は退會し、小杉、森田等は日本美術院洋畫部に加はる等會員の異動はあつた。二科會は、大正三年以後毎歲秋展覽會を開催し、現在に至つたが、其の啓蒙的意義は既に夙く盡くされたと言ひ得る。

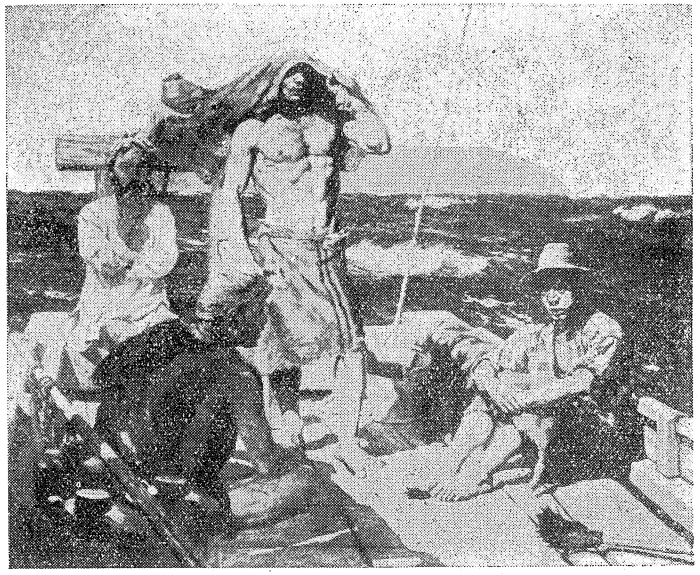
而して、再興日本美術院は其の創立に際しては、邦畫と洋畫との區別を設けず、再興發起人として小杉未醒を加へ、後同人に洋風畫家長谷川昇（明治十九年―）、倉田白羊（明治十四年―）森田恒友、山本鼎（明治十五年―）、足立源一郎が加へられたが、大正九年に至り、之等の人々は連盟脫會した。又大正四年には岸田劉生を中心として木村莊八、中川一政等により草土社が設けられ、大正十一年に至る迄毎歲展覽會を催した。かくして、曩に日本美術院を脫したる小杉未醒其他の同人は、梅原龍三郎及び草土社の岸田其他の會員を加へて春陽會を組織し、大正十二年より展覽會を開催し、今日に至つてゐる。然し、此間、會員には多少の異動があつた。

五

大正初期に於ける洋風畫界の諸派の勃興と主なる團體の動きは以上の如くであるが、大正八年帝國美術院の創立と共に、官設展覽會にも一つの革新が齎らされた。而して最初に洋畫部より會員に推されたのは黑田清輝、岡田三郎助、和田英

作、中村不折であつた。又第一回帝展の審査員に擧げられたのは、藤島武二、長原孝太郎（元治元年昭和五）、石川寅治、太田喜二郎（明治十六年—）、金山平三（明治十六年—）、滿谷國四郎、南薫造、中川八郎、中澤弘光であつたが、其後藤島、滿谷、南、中澤等は會員となり、審査員にも次第に新進が拔擢された。而して、十五回に亘る帝展に於て、優れた作品を遺したのは、滿谷國四郎をはじめ、中村彝（明治二十一年—大正十二年）、青山熊治、田邊至（明治十九年—）、片多徳郎（明治二十二年—昭和九年）、牧野虎雄（明治二十三年—）、高間惣七（明治二十二年—）、前田寛治（明治二十九年—昭和五年）等である。

又大正七年京都の日本畫家土田麥僊等に依つて國畫創作協會が設立されたが、大正十五年梅原龍三郎、川島理一郎がこれに加つて第二部（洋畫、彫刻、工藝）を設けた。昭和三年に至つて同會は解散したが、第二部は其の儘留つて國畫會と改稱し、專ら洋畫部を中心として展覽會を開催し、今日に至つてゐる。又昭和三年には、二科會員たりし、兒島善三郎、里見勝藏、春陽會の三岸好太郎、國畫會の高畠達四郎等により獨立美術協會が設立された。



南風　和田三造筆

文部時報刊行計畫摘要

一 目的　本省行政ニ關スル法令竝ニ諸般ノ施設事項ヲ周知セシムルト共ニ所管ノ行政及教育機關等ノ聯絡提携ニ便ナラシムルヲ以テ目的トス

二 內容　本時報登載事項ノ大要左ノ如シ

詔書　勅語　法律
勅令　閣令　省令
訓令　告示　諭
訓示　告示　通牒（例規トナリ又ハ一般ノ參考トナルモノ）
法令解說　指令（例規トナルモノ）
質疑應答（本省ヨリ公文ニテ回答シタルモノ）
任免、陞敍、敍位、敍勳　表彰
講演、講話、談話　研究調査　統計
人事　公告　寫眞

三 編纂　文部時報編纂ノ爲編纂委員長竝編纂委員若干名ヲ置ク
編纂委員長ハ文書課長ヲ以テ之ニ充テ編纂委員ハ文書課員中ヨリ之ヲ命ズ
必要アルトキハ審査委員ノ意見ヲ求ムルコトアルベシ
資料蒐集ノ爲省內各局課ニ文部時報報告委員ヲ置ク
文部時報報告委員ハ各部局課ノ理事官、屬、囑託等ヲ以テ之ニ充ツ
必要ニ應ジ直轄各部、各府縣其ノ他ヨリ資料ヲ求ムルコトヲ得

四 發行　本時報ハ菊版、每號約六十四頁、定價金貳拾錢ヲ標準トシ每月三回一ノ日ヲ發行期日トス

定價表

一部	一ケ月	六ケ月	一ケ年
金貳拾錢	金六拾錢	金參圓六拾錢	金七圓貳拾錢
送料共	送料共	送料共	送料共

臨時增刊又は增大號發行の節は別に代金申受けます
御註文は總て前金に願ひます前金切れの場合は送本いたしません

廣告料

廣告料は一頁五拾圓、二分ノ一頁參拾圓、四分ノ一頁拾八圓とす
掲載頁數は壹部每に拾參頁を超ゆることを得ず
右文部省の御指定に依つたものです

昭和十三年十月二十九日印刷納本
昭和十三年十一月一日發行（第六三六號）

東京市麴町區土手三番町十三番地
發行者　大谷仁兵衛

横濱市戸塚區戸塚町字間坂千六百七十番地
印刷者　大庭公平

東京市牛込區西五軒町五十二番地
印刷所　行政學會印刷所第二工場
電話牛込二九九六番

東京市京橋區銀座西七丁目一番地
發行所　帝國地方行政學會
電話銀座六六〇、六六一、六六二、六六三番
振替貯金口座東京十三番

禁無斷轉載

文部時報

第六百三十七號

目次

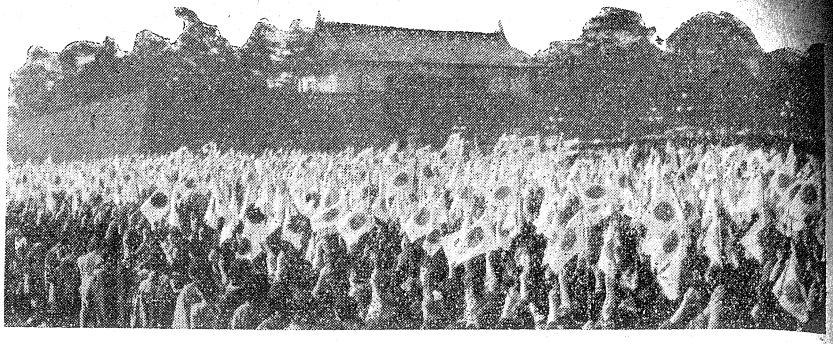
卷頭（格言三則）

人口增加と海外發展……東京商科大學長 法學博士 上田貞次郎……二

儒教と國民精神……東京高等師範學校助教授 小林信明……八

小學算術尋四下編纂趣旨……文部省圖書監修官 鹽野直道……二一

明治以降美術の變遷（三）……美術研究所囑託 隈元謙次郎……二九



躬行示範のいさを長へに芳ばし……三五

故佃明正訓導を偲ぶ（櫻田有）

故陸軍歩兵中尉田中虎雄氏の事蹟（間野庫太）

故金井訓導（伊場英三）

故陸軍歩兵少尉坂井爲作氏の功績（小野村胤敏）

七田泉伍長の功績狀（岩田富三）

嗚呼古賀中尉（寺山角一）

增谷忠見教諭の戰死（津澤佐正）

松下先生を偲ぶ（松井二郎）

應召に際し愛國貯金通牒を教へ子に分與した故本多宗三郎君（佐々木誠俊）

故陸軍歩兵伍長高津彌之助氏（高橋良夫）

故本校指導員陸軍歩兵中尉高橋喜夫君（竹田兵雄）

勅令……勅令第六百九十六號（氣象觀測事務ニ關スル件）……四九

訓令……厚生省文部省訓令第一號（小學校卒業者ノ職業指導ニ關スル件）……四九

告示……文部省告示第三百四十三號（重要美術品等認定）……四九

敍任及辭令（自昭和十三年十月二十一日至同三十一日公表ノ分等）……五〇

彙報……漢口陷落祝賀——講師囑託並解囑——帝國學士院總會及部會——高等學校高等科教員試驗檢定合格者——檢定教科用圖書——活動寫眞フイルム頒布——推薦映畫——活動寫眞フイルム認定——東京科學博物館開館日數等——歸朝——休職——退職——死去——正誤……五八

明治以降美術の變遷（三）

美術研究所囑託　隈元謙次郎

一　彫刻

由來、吾が國の彫刻は、佛教の隆盛と共に木彫を主體として發達し來つたが、近世に至り佛教の衰頽と共に更に振はず、幕末より明治初期に於ては極度に衰滅に瀕し、僅かに德川以來の宮彫、根付彫刻及び雛人形の如き工藝的のものゝみが製作されてゐるに過ぎなかつた。幕末、明治初期の佛師としては高村光雲の師高村東雲（文政九年―明治十二年）あるのみであり、又彫物大工として名を留めた者に後藤彌太郎、小松豊次郎があり、根付彫刻師として山田寶玉があつた。然るに、明治初年諸外國との貿易勃興するに當つて、我が藝術作品の輸出奬勵が行はれた結果、輸出向の彫刻が製作さるゝに至つた。それは牙彫に依る小彫刻であつて、猿廻、餌差、鼠の桝落し等の風俗人形を寫實的に彫刻したものである。之等の牙彫作品は明治十年の第一回内國勸業博覽會にも見られたが、同十四年の第二回の博覽會に於ては牙彫の出品が彫刻部の大半を占めた。之等の作家として石川光明（嘉永五年―大正二年）、旭玉山（天保十二年―大正十二年）、島村俊明（安政二年―明治二十九年）、金田兼次郎等が知られてゐる。而して、此時代に稱へられた國粹保存論は彫刻界にも波及し、之等の牙彫彫刻家を中心として高村光雲等の木彫家を加へて研究會が設けられ、明治十九年最初の彫刻家團體東京彫工會が創立され、翌二十年を第一回として毎歲彫刻競技會を開催し、貢献するところあつた。

之より曩、明治九年工學寮内に美術學校が設けられ、繪畫科と竝んで彫刻科が置かれ、伊太利人ラグーザ（1841―1927）が其の指導に當つた。政府は彫刻の奬勵の爲に特に彫刻科の生徒に限り官費を以て就學せしめた。茲に於て我が國に於て

初めて西洋彫刻術が傳へられた。ラグーザは明治十五年に至る間に、彫塑、大理石彫刻、石膏の型取り或は建築裝飾等に就いて親しく指導した。彼の薫陶を受けたる者に大熊氏廣（安政三年―昭和九年）、藤田文藏（文久元年―昭和九年）、近藤由一、佐野昭（慶應三年―）寺内信一（文久三年―）等がある。之等の外小倉惣次郎（弘化三年―大正二年）は學校外に於てラグーザの指導を受け、大理石彫刻に於て名を成すと共に、木彫家に西洋彫刻の技術を傳へた。次に夙く渡歐して彫刻を學べる者に長沼守敬（安政四年―）がある。彼はヴエネツイア美術學校に學び、彫塑家として歸朝し、大熊、藤田、小倉等と共に明治時代の洋風彫塑の開拓に盡した。

二

明治二十年東京美術學校が創立さるゝや彫刻科が設けられ、特に我が國固有の木彫のみが採用された。是は日本畫に於けると同樣の主旨に依るものであり、最初の教師に擧げられたのは竹内久一（安政四年―大正五年）であつた。彼は牙彫を棄てゝ奈良に於て古彫刻の研究に從事してゐたものである。次で彼の推薦に依り高村光雲（嘉永五年―昭和九年）が推擧され、又石川光明、山田鬼齋（元治元年―明治三十四年）等が用ひられた。斯くして、吾が木彫界の面目は一新し、内外の博覽會等にも木彫の優れた作品が出品さるゝに至り、又楠公像、西鄕南洲像等の如き木彫を原型とせる記念彫刻も製作さるゝに至つた。

而して、東京美術學校に於ては、明治二十九年日本畫に竝んで西洋畫科が置かれたが、彫刻科に於ても明治三十一年木彫の外に塑像の實技を加へ、翌三十二年には塑像科が置かれた。其の初代教授となつたのは長沼守敬である。彼の在職は短期間であつたが、其の後任には藤田文藏が用ひられた。斯くして、現代彫刻の基本たる木彫と塑造の二科が確立し、洋風彫刻も再興に向つた。此時代彼等の指導を受けた者に渡邊長男（明治七年―）、中村直彥、長愛之、本保義太郎、青木外吉、武石弘三郎（明治十年―）、水谷鐵也（明治九年―）、高村光太郎（明治十六年―）等があつたが、是等の人々は彫塑會を組織し、明治三十四年より暫くの間毎歲展覽會を開催した。

而して、明治三十五年豫て獨逸に在つて彫塑を研究中であつた新海竹太郎（明治元年―昭和二年）が歸朝した。彼は初め木彫を學び、次で小倉、惣次郎に洋風彫刻の指導を受け、後獨逸に留學し、伯林美術學校教授エルンスト・ヘルテル Ernst Herter に師事した。歸朝後は、太平洋畫會に據つて其の作品を發表しつゝあつた。明治四十年東京府勸業博覽會が開催さるゝや「決心」、「騎馬」等を出品して世人の注目を惹いた。此博覽會には彼の外、北村四海（明治四年―昭和二年）、毛利敎武、地田勇八（明治十九年―）等の作品があり、文展の開催を前にして、漸く吾が彫刻界も軌道に乘つた。

三

文展の開設は、彫刻にとつても一轉機を與へ、木彫家、彫塑家が擧つて其の技を競ふこととなつた。其の第一回展覽會に於て審査員に擧げられたのは塚本靖を主任として、高村光雲、石川光明、竹内久一、長沼守敬、白井雨山（元治元年―昭和三年）、大熊氏廣、新海竹太郎、新納忠之助等であつた。而して文展に於て活躍せる者は審査員新海竹太郎をはじめ、當時の青年作家朝倉文夫（明治十六年―）、ロダンの薫陶を受けたる荻原守衛（明治十二年―明治四十三年）、其の他北村四海、建畠大夢（明治十三年―）、北村西望（明治十七年―）、藤井浩祐（明治十五年―）、池田勇八、石川確治（明治十四年―）、石井鶴三（明治二十年―）、堀進二（明治二十三年―）等の彫塑家と光雲門の米原雲海（明治二年―大正十四年）、山崎朝雲（慶應三年―）及び平櫛田中（明治五年―）、内藤伸（明治十五年―）等の木彫家がある。

大正時代に入り、繪畫界に於ては激しい動搖と分裂があつたが、彫刻界は未だ是等に從屬的であつたに過ぎない。即ち日本美術院の再興に當つて、平櫛田中、内藤伸、吉田白嶺（明治四年―）、佐藤朝山（明治二十一年―）が參加出品して同人に擧げられ、後藤井浩祐、石井鶴三、戸張孤雁（明治十九年―昭和二年）、中原悌次郎（明治二十一年―大正十年）等の彫塑家が同人となつた。又院友たりし川上邦世（明治十九年―大正十四年）も院展に於ける特異なる木彫家として知られたが夭折した。

又二科會も大正八年彫刻部を置き、長く佛蘭西に留まりロダンに師事した藤川勇造（明治十六年―昭和十年）が會員となり、後渡邊義知が會員に、ザツキンが會友に加はつた。

此の年帝國美術院の創立と共に高村光雲と新海竹太郎が會員となり、又第一回帝展の審査員には建畠大夢、山崎朝雲、米原雲海、朝倉文夫、北村四海、北村西望が擧げられた。斯く文展時代の審査員と帝展の審査員の變動は、又、彫刻界の推移を示すものである。其後朝倉文夫、北村西望、山崎朝雲及び院展より復歸せる内藤伸が會員に推された。茲に文展末期

より活躍し、又帝展に於て認められたる作家を擧ぐれば、木彫に長谷川榮作、佐々木大樹、關野聖雲、後藤良、松尾朝春、三木宗策等があり、彫塑に齋藤素巖、吉田三郎、吉田久繼、安藤照、小室達、横江嘉純等がある。

大正十五年に至り齋藤素巖、日名子實三は、構造社を組織し、翌昭和二年より展覽會を開始し、荻島安二、濱田三郎、陽咸二等が加はり、其後會員の異動はあつたが今日迄繼續して展覽會を開催してゐる。又此の年國畫創作協會に第二部を置き、洋畫と同時に彫刻工藝が加はり金子九平次が會員となつた。昭和三年國畫會を改稱するに際し、高村光太郎が參加したが、後清水多嘉示が會員となつた。

工藝美術

明治維新による封建制度の沒落と共に、其の傳統と材料の關係より地方に隆盛を保てる陶磁器、染織等の工藝美術は、從來の各領主の保護を失ひ、又金工の如きも武士階級の消滅に伴つて其の需要の大半を失つた。

然るに、歐米との交易漸く繁榮を來せるに際し、牙彫による小彫刻、金工による根付、目貫、陶磁器、漆器等が製作さるゝに至つた。而して、之等の工藝品を貿易品として製作輸出する爲に民間に於て二三の會社が創立された。就中、起立工商會社は、明治六年墺國維納萬國博覽會參加を機緣として松尾儀助、若井兼三郎等に依つて創立され、英國のアレキサンドル・パーク會社、維納のカルル・タラオの如きと特約を結び、明治中期に至る迄諸分野の工藝家に依囑して多くの作品を輸出した。是等の製作にたづさはつた者に陶磁器の服部杏圃、河原德立、七寶の濤川惣助、漆器には梶山重次郎、小川松民、植松抱民、白山松哉、金工には塚田秀境、杉浦瀧次郎等があつた。其後明治十年には獨逸人の經營したアーレンス商會が設立された。

而して、是等の工藝品は歐米諸國の萬國博覽會に於て展示された。即ち明治六年の墺國、同九年の米國、同十一年、二十二年、三十三年の佛國、同十六年の和蘭及米國の萬國博覽會、同十八年の英國の萬國發明品博覽會、及びニユルンベルヒの金工博覽會、同二十六年の米國シカゴの博覽會等である。殊に明治六年の墺國博覽會には、初めて國家として參加し、吾が工藝美術の優秀性を認めしめ、惹いて吾が政府をして內國勸業博覽會開催を決意せしむる機緣ともなつた。

斯くして內國勸業博覽會の開催さるゝこと數次、又東京、京都を始め地方にも學校、研究所が設立され、漸く工藝奬勵の道は拓けた。東京美術學校創立にあたつては、美術工藝科の中に金工、漆工の二科が置かれ、加納夏雄（文政十一年―明治三十一年）、海野勝珉（弘化元年―大正四年）、小川松民（弘化四年―明治二十五年）等が用ひられた。明治二十三年帝室技藝員任命にあたり彫金の加納夏雄、蒔繪の柴田是眞（文化四年―明治二十四年）、織工の伊達彌助（―明治二十五年）が此の恩命を拜し、後數次の任命に陶磁の清風與平（嘉永四年―大正三年）、宮川香山（天保十三年―大正五年）、伊藤陶山（弘化三年―大正九年）、諏訪蘇山（嘉永四年―大正十一年）、金工の海野勝珉、鈴木長吉（嘉永元年―大正八年）、香川勝廣（嘉永六年―大正七年）、平田宗幸、漆工の川之邊一朝（天保元年―明治十三年）、池田泰眞（文政八年―明治三十六年）、白山松哉（嘉永六年―大正十二年）、七寶の濤川惣助、並河靖之（弘化二年―昭和二年）等が推された。

次に金工、陶磁器、七寶、漆器、染織等に就て略述する。

金工に於ては、明治時代に秦藏六、鈴木長吉寶、子山宗民、岡崎雪聲（安政四年―大正十年）、大島如雲（―安政五年）等の鑄金家があり、又大阪に大國柏齋（安政三年―昭和九年）、加賀に宮崎寒雄等があつた。彫金には前述の加納、海野、香川の外塚田秀境（嘉永元年―大正七年）等がある。而して、明治後期に至り、日本金工協會、東京鑄金會等の設立があり、又大正二年商工省工藝展覽會の開設、帝展第四部の設置等があつた。而して現代作家として知られてゐる人には、香取秀眞（―明治七年）、清水龜藏（―明治八年）等がある。

陶磁器も明治初年に於ては輸出向の作品が主であり、又窯も從來の形式の外に歐風の圓窯が用ひられ、化學の進歩と共に釉藥の發見、石膏型の輸入、銅版繪付の再興等があつた。東京には新に瀨戸の陶工井上良吉が淺草に窯を設けたるを始め、納富介次郎の江戸川製陶所、ドクトル・ワグネル Dr. G. Wagner 加藤友太郎の友玉園、竹本隼太（嘉永元年―明治二十五年）の窯等があつた。又横濱に京都から移り來つた宮川香山がある。京都は古來有名であつたが、明治時代の作家としては三代清風與平、四代高橋道八、清水六兵衞（四代及五代）、眞清水藏六、錦光山宗兵衞、伊東陶山、永樂和全等がある。其他肥前有田、瀨戸、或は九谷等にも名工が出でた。而して、現代作家としては前述の作家名を襲名せる人々及び澤田宗山（―明治十四年）、河村靖山（―明治二十三年）、河井寛次郎（―明治二十三年）、富本憲吉（―明治十九年）、板谷波山（―明治五年）、濱田庄司等がある。

七寶も維新後は大いに進歩し、名古屋をはじめ横濱、東京に於て製作され、塚本貝介、濤川惣助、並河靖之等が優れた作品を示した。

維新前は蒔繪は京都にも名工があり、又讃岐の玉楮象谷の如き著名であつたが、明治に入つては東京を中心とせる觀がある。柴田是眞は畫家として知られてゐるが、蒔繪に於ても近代の巨匠であつた。是眞の外、池田泰眞、川之邊一朝、小川松民、植松抱民、白山松哉等がある。又明治末期以後の人に六角紫水（慶應三年——）、赤塚自得（明治四年—昭和十一年）、植松包美（明治五年—昭和八年）等がある。京都の迎田秋悅（明治十四年—昭和八年）も忘れ得ぬ作家であつた。之等蒔繪の進歩は日本漆工會（明治二十三年創立）、漆藝會（同三十一年創立）、日本漆藝會（大正十年創立）等に負ふところが多い。

明治以後の染織工藝は、生活樣式の變化と伴ひ、服飾以外壁掛、窓掛、敷物等が製作され、染織化學、機織機械等の進歩は、其の手法にも著しい進歩を與へた。而して染織工藝の中心をなしたのは京都であり、伊達彌助（初代及二代）、二代川島甚兵衛、飯田新七、西村總左衛門、龍村平藏（明治九年——）等が知られてゐる。又近年東京に於ても新人の輩出する者多く、和田三造、藤井達吉（明治十四年——）、鹿島英二（明治七年——）、廣川松五郎（明治二十一年——）等がある。（完）

文部時報刊行計畫摘要

一 目的 本省行政ニ關スル法令竝ニ諸般ノ施設事項ヲ周知セシムルト共ニ所管ノ行政及教育機關等ノ聯絡提携ニ便ナラシムルヲ以テ目的トス

二 內容 本時報登載事項ノ大要左ノ如シ

詔書	勅語	法律	
勅令	閣令	省令	
訓令	告示	告示	諭
訓示	指令（例規トナルモノ）	通牒（例規トナリ又ハ一般ノ參考トナルモノ）	
法令解說	質疑應答（本省ヨリ公文ニテ回答シタルモノ）		
任免、陞敍、敍位、敍勳	表彰	復命書及報告書	
講演、講話、談話	研究調査	統計	
人事	公告	寫眞	

三 編纂 文部時報編纂ノ爲編纂委員長竝編纂委員若干名ヲ置ク

編纂委員長ハ文書課長ヲ以テ之ニ充テ編纂委員ハ文書課員中ヨリ之ヲ命ズ

必要アルトキハ審査委員ノ意見ヲ求ムルコトアルベシ

資料蒐集ノ爲省內各局課ニ文部時報報告委員ヲ置ク

文部時報報告委員ハ各部局課ノ理事官、屬、囑託等ヲ以テ之ニ充ツ

必要ニ應ジ直轄各部、各府縣其ノ他ヨリ資料ヲ求ムルコトヲ得

四 發行 本時報ハ菊版、每號約六十四頁、定價金貳拾錢ヲ標準トシ每月三回一ノ日ヲ發行期日トス

定價表

一部	一ヶ月	六ヶ月	一ヶ年
金貳拾錢	金六拾錢	金參圓六拾錢	金七圓貳拾錢
送料共	送料共	送料共	送料共

◉臨時增刊又は增大號發行の節は別に代金申受けます

◉御註文は總て前金に願ひます前金切れの場合は送本いたしません

廣告料

廣告料は一頁五拾圓、二分ノ一頁參拾圓、四分ノ一頁拾八圓とす

掲載頁數は壹部每に拾參頁を超ゆることを得ず

右文部省の御指定に依つたものです

昭和十三年十一月九日印刷納本

昭和十三年十一月十一日發行（第六三七號）

本號ニ限リ附錄共定價金壹圓

東京市麴町區土手三番町十三番地

發行者 大谷仁兵衛

印刷者 大庭公平 神奈川市發子區發子町字朝坂千六百七十番地

印刷所 東京市牛込區西五軒町五十二番地 行政學會印刷所第二工場 電話牛込二九九六番

東京市京橋區銀座西七丁目一番地

發行所 帝國地方行政學會 電話銀座六六〇、六六一、六六二、六六三番 振替貯金口座東京十三番

禁無斷轉載